

1 詩の「じん」を読む

〈茨木のり子〉

かなしみ

*たにかわしめんたろう
谷川俊太郎

あの青い空の波の音が聞こえるあたりに
何かとんでもないおとし物を
僕はしてきてしまったらしい

透明な過去の駅で

遺失物係の前に立ったら

僕は余計に悲しくなってしまう

(詩集『二十億光年の孤独』)

遺失物係の世話になったことのある人は多いはずですが、おとし物が戻ってきたときはうれ
しいけれど、^①あとかたもなく消えうせてしまったときの^②侘しき。おとし物が多いせいにか係の
人は[A]的にさばいて、あまり人間的な言葉を発してくれませんか。

この詩のなかの遺失物係に人はいたのでしょうか。^③人気がない駅。どうも無人だったよう
な気がします。しかも、おとし物が何だったかも忘れてしまって、^④忘れたという感覚だけが
残っていて。途方にくれて。すべてが曖昧で、それなのに、へんに澄んだ世界です。

生まれてくるとき、人はどういふところを通ってきたのでしょうか。

「私はどうして今、ここにいるのだろうか」

「いったい何をやっているのだろうか」

「なんのために生まれてきたのだろう」

思い出せそうで、うまく思い出せない世界。両親がいたから生まれてきたのに間違いはな
いけれど、もう一つ別の、[B]的なルートに思いを馳せるようになったとき、人は青春の戸
口近くに立ったことになるのでしょうか。

日本語には、^⑤へものごころつくという味わい深い言いかたがありますが、体がつねに細胞
分裂をくりかえして大きくなってゆくように、[C]の世界でも幼年時代の単一さから、分裂
の気配を見せはじめます。自分を[D]的にとらえようという動きが出てきて、さまざま
欠落感になやまされるようになります。「かなしみ」という詩も、そんな問いの一つかもしれ
ません。

【問一】 文脈理解 空欄A・B・Dに入る最も適切な語を、次の中からそれぞれ選べ。

- ① 人道 ② 抽象 ③ 一般 ④ 具体 ⑤ 事務 ⑥ 客観 ⑦ 専門

【問二】 文脈理解 空欄Cに、文脈を考えて最も適切な漢字を入れよ。

【問三】 心情理解 傍線部(1)「あとかたもなく消えうせてしまったときの侘しき」と最も近
い意味の言葉を、本文中から五字以内で抜き出せ。

【問四】 主題理解 傍線部(2)について、いつから「人は青春の戸口近くに立」つことになる
のか。次の中から一つ選べ。

- ① 重要なとんでもないおとし物をしてしまい、わびしく悲しくなったときから。
- ② 遺失物係の人に冷たくあしらわれ、現実の厳しさを思い知ったときから。
- ③ 何かとんでもないおとし物をしたような気分を襲われ、悩みだしたときから。
- ④ 自分の両親は本当の両親ではないと思ひこみ、本当の両親を捜しだしたときから。

実戦セリ

覚えておきたい

漢字の知識①

○ 次の中から国字でな
いものを一つ選べ。

- ① 辻 ② 畑
- ③ 海 ④ 峠

○ 国字とは和製漢字のこ
と。

- ① 「つじ」(十字
路)、② 「はたけ」(火で
焼いた耕地。草木を焼き
払った跡に作物を作る焼
畑農業というのがある)、

- ④ 「とうげ」(山を上っ
て下るところ) は日本人
が作った字。○

○ 次の漢字の偏名を答
えよ。

- ① 胸 ② 理

○ ① にくづき(胸・
胴・脳など身体に関する
字はにくづき、朗・期・
朧などはつきへん) ②
たまへん(玉である)

1 詩のうしろを讀む

▼ 解答

- 問一 A ⑤ B ② D ⑥ 問二 心(精神) 問三 欠落感
問四 ③

解法のポイント

問一 空欄に適語を補充する問題は、その部分だけを見て、当てずっぽうに入れるのではなく、前後を広く見て(場合によっては問題文全体を広く見て)、同じ表現をしているところがないか、また、対比的なり反対なりの内容になっているところはないかと探し、答えの範囲を限定していくとよい。

A 「A」的にさばいて、あまり人間的な言葉を発してくれないこと。とあるから、「A」的には「人間的」の反対の意味の言葉が入ることがわかる。⑤事務(的)である。事務的とは、扱いが形式的なことをいう。

B 両親がいて、そのために自分がいるということは間違いないことだが、それより深い意味で、哲学的な意味で、自分なぜ、何のために生まれてきて今ここにいるのか、と思いを馳せるようになるというのである。それにあたるのは、選択肢の中では②抽象(的)である。抽象(的)とは、共通な性質を抜き出し、本質的、一般的な面をとりあげることである。反対語は具体(的)で、これは実際にあるさま、知覚できるものとし

れに近い五字以内の言葉としては「欠落感」がある。この詩の「とんでもないおとし物」というのは、青春時代に感じるさまざまな欠落感を比喩したものだから、これが答えとなる。なお、喪失感が、あったものがなくなつて感じるむなしさを感じ、であるのに対して、欠落感とは、あるべきものがなくて感じるむなしさを感じ、である。

問四 とんでもないおとし物をし、遺失物係の前で、おとし物が見つからず、また、何をおとしたのかもわからず途方にくれて悲しくなつたというのは、現実のことではなく、比喩(たとえ)であり、何か心の中の風景を象徴したものである。だからおとし物、遺失物係を実際のこととして①と②は誤り。④は、「自分の両親は本当の両親ではないと思ひこみ」とあるが、本文には「両親がいたから生まれてきたのに間違いはないけれど」とあるように、現実の両親を否定したり疑ったりはしていない。正解は③。何かとんでもないおとし物をしたような気分――さまざまな欠落感に襲われ、自分は、なんのために生まれてきて、どうして今ここにいるのだろうかということを考えだした時から、人は青春の戸口近くに立つのだというのである。

構成

「かなしみ」

あの青い空の波の音が聞こえるあたりに → 思い出せそうで、何かとんでもないおとし物を うまく思い出せない僕にしてきてしまったらしい
透明な過去の駅で → 欠落感
遺失物係の前に立つたら → 侘しき
僕は余計に悲しくなつてしまった → 「かなしみ」

であるまでである。

D たとえば、初心者がスポーツに熱中している時は、無我夢中でプレーをしているから、自分がどのようなフォームでプレーしているかを想像することはできない。誰かに自分の姿をビデオで撮ってもらい、自分のフォームを「客観的」に見てはじめて、自分の欠点やくせに気づくものである。幼年時代は心が単一で、自分とは何か、という深いことなど考えずにいたのが、青春時代を迎え、「自分とは何か」と考える自分」というようである。自分で自分を客観的に考えるようになるのである。客観(的)とは物事につき放し、冷静、公平に見ることである。反対語は主観(的)である。

なお、①人道(的)とは、情愛があり、人間的であり、道義にかなつていふことをいう。

問二 これも、その部分だけ見て考えるのではなく、前後をよく見て文の構造や対応関係をつかんで考える。
体がつねに細胞分裂をくりかえして大きくなってゆくように、
「C」の世界でも……分裂の気配を見せはじめます。

という対応関係があるから、「C」には「体」の反対語が入ることがわかる。考えられるのは頭か心だが、直前の「ものごころつく」という言葉や、幼年時代から青春時代への心の成長という文脈から、「心」を入れるのがよい。「精神」も正解とするが、「体」(漢字一字)との対比や、全体の、やわらかな文体から考え、「心」がより適切である。

問三 傍線部(1)の気持ちに最もふさわしいのは「喪失感」である。喪失(喪の字を「喪」と書き誤る諸君が多いので注意)とは、自信喪失、記憶喪失というように、あったものがなくなることである。しかし「喪失感」という言葉は本文にはない。そ

青春の入り口

「私はどうして今、ここにいるのだろうか」
「なんのために生まれてきたのだろうか」
両親がいたから生まれてきたということとは別の、
抽象的なルートに思いを馳せはじめ。
心の世界でも幼年時代の単一さから、分裂の気配を見せはじめ。
自分を客観的にとらえようという動きが出てくる。
さまざまな欠落感――「かなしみ」

筆者・出典

茨木のり子(いばらぎ・のりこ)は詩人。一九二六年、大阪府生まれ。戦後、詩誌『権』を創刊し、川崎洋、吉野弘、大岡信、飯島耕一ら現代詩人とともに活躍する。詩集に『見えない配達夫』『鎮魂歌』など。

問題文は、中学生・高校生のための詩の入門解説書『詩のこころを讀む』の冒頭の部分である。

ある作家の全集を読むのは非常にいいことだ。研究でもしようというのでなければ、そんなことは全く無駄事だと思われがちだが、けっしてそうではない。読書の楽しみのゲンセンにはいつも「文は人なり」という言葉があるのだが、この言葉の深い意味をリョウカイするのは、全集を読むのが、いちばん手取り早いしかも確実な[A]なのである。一流の作家なら誰でもいい、好きな作家でよい。あんまり多作の人は厄介だから、手頃なのを一人選べばよい。その人の全集を、日記や書簡の類に至るまで、隅から隅まで読んでみるのだ。そうすると、一流と言われる人物は、どんなにいろいろな事を試み、いろいろな事を考えていたかがわかる。彼の代表作などと呼ばれているものが、彼の考えていたどんなにたくさんの思想を[B]にした結果、生まれたものであるかが納得できる。単純に考えていたその作家の姿などはこの人にこんな言葉があったのか、こんな思想があったのかという驚きで、めっちゃめちゃになってしまおうであろう。その作家の性格とか、[C]とかいうものは、もはや表面の処にハンゼンと見えるというようなものではなく、いよいよ奥の方の深い小暗い処に、手探りで捜さねばならぬもののように思われてくるだろう。僕は、理窟を述べるのではなく、経験話を話すが、そうして手探りをしているうちに、作者にめぐり会うのであって、誰かの紹介などによって相手を知るのではない。こうして、小暗い処で、顔は定かにわからぬが、手はしっかりと握ったという具合なわかり方をしてしまうと、その作家の[D]とか失敗作とかいうような区別も、べつだんだん大した意味を持たなくなる、と言うより、ほんの片言隻句にも、その作家の人間全部が感じられるというようになる。

【問一】 二重傍線部(ア)・(イ)・(ウ)のカタカナを漢字で記せ。

【問二】 空欄A～Dにはどのような語が入るか。次の中からそれぞれ選べ。

- | | | | | |
|---|------|------|------|------|
| A | ① 読書 | ② 認識 | ③ 近道 | ④ 方法 |
| B | ① 犠牲 | ② 無駄 | ③ 白紙 | ④ 複雑 |
| C | ① 言葉 | ② 内面 | ③ 個性 | ④ 思想 |
| D | ① 駄作 | ② 傑作 | ③ 豊作 | ④ 贗作 |

【問三】 問題文の後に左にあげたいずれかの一文が続いている。次の中から最も適当なものを一つ選べ。

- つまり、読書とはこのような手続きをふむことによって達成されるのである。
- したがって読書の目的は、その作家の人間像と出会うことにあるといえる。
- 読書の楽しみとは、この微妙な感覚を大切にすることのなかにある。
- これが、「文は人なり」という言葉の真意だ。

【問四】 傍線部(1)はどのような意味か。次の中から最も適当なものを一つ選べ。

- 誰かの紹介などによってでなく、手探りをしているうちに作者にめぐり会うというのが、自分の経験である。
- 理窟や誰かの紹介などによるのではなく、手探りをしているうちに作者にめぐり会えるのである。
- 理窟ではなく、手探りして作者にめぐり会うことがよい経験といえるのである。
- 小暗い処を手探りにすることによってしか作者にめぐり会わないというのが自分の理論である。

*書簡 手紙のこと。

*誰かの紹介などによつて相手を知る その作家についての研究書や解説を読むということ。

*片言隻句 へんげんせきく。ちよつとした短い言葉。

実戦セリ

覚えておきたい

文芸用語①

□アイロニー(イロニー) 皮肉、反語と訳されるが、意味としては逆説(パラドックス)に近い。しかし、逆説よりも皮肉っぽく、シニカルな(冷ややかな)気持ちがおこめられている。「教師が熱心に指導すればするほど生徒を追いつめる」という状況は、逆説ともアイロニーとも言える。アイロニーと言った場合、シニカルに突き放し、皮肉っぽい気持ちが含まれる。

□カタルシス

浄化作用と訳される。すぐれた文学作品を読むと心が洗われたようになる。そのような意味での浄化作用である。

1 読書について

▼ 解答

- 問一 (ア)源泉 (源泉) (イ)了解 (了解) (ウ)判断 問一 A ④
 B ① C ③ D ② 問三 ④ 問四 ①

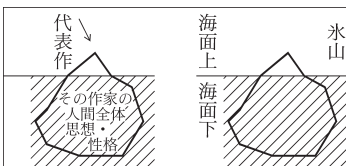
解法のポイント

問一 (ア)「源泉」とは、水や温泉のわき出るみなもとのことであり、そこから一般に、物事の生ずるみなもとのことをいう。「源泉」とも書く。(ウ)「判断」は、はっきりとよくわかるようす。

問二 A について。この一文は、言い換えると、「文は人なり」という言葉の深い意味を理解するための「手段・方法」として、全集を読むのが一番よいということである。④「方法」が正解となる。

B について。この前後の文章で述べられていることを、まず説明する。「氷山の一角」(氷山の海面に見える部分は全体の一部にすぎない)物事の一部分だけしか表面に現れていない」という言葉があるが、ある作家の代表作というものは、その人の思想や人間全体のうちの、表面に結晶して現れた一部分でしかないのである。

だから、日記や書簡(手紙)の類まで、全集をすみずみまで読むというのである。そのことによって、代表作を読んだだけで



りあげていたその作家に対するイメージが打ち砕かれ、手探りをしながらもその作家の人間全体と出会えるというのである。

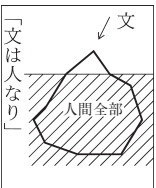
B に入る選択肢を考えてみよう。海面下にかくれたその作家の人間全体・思想は、表面に現れていないだけであって、②「無駄」にあるわけではない。③「白紙」にした(すべてなかったことにする。0に戻す)ものでもない。④「複雑」は、代表作||表面に現れたもの||たくさんの思想||海面下にあつて見えないもの、という関係がとらえられない。正解は①「犠牲」である。

C について。「性格」とか「C」とかという、並列関係であるから、「性格」に似かよった意味の言葉が考えられる。③「個性」である。「あの人は個性的な人だ」「あの人はユニークな人だ」という時、我々は、普通、服装や行動など、表面に現れたものを見て判断しがちである。しかし、表面に「判断」と見える「個性」というのは、本当の個性ではないというのが筆者の考えである。

D について。「D」とか失敗作とかいうような区別とあることから、「失敗作」の反対の意味の言葉が入ることがわかる。②の「傑作」が入る。なお、④「贋作(がんさく)」とは、にせ物のこと。

問三 ①から④までの選択肢の中で、内容的にみて、続きぐあいがいちじるしく不自然になるものはない。そこで、文章のフイニッシュとして、一番切れ味のあるものを選ぶことになる。すると、問題文の最初のほうに、「読書の楽しみの源泉にはいつも『文は人なり』という言葉がある」とあるのが目につく。文

標準 現代文 解説・解答書



章にはその人の人柄の全体が現れている、という意味の言葉だが、これが読書の楽しみの源泉だと筆者は言っている。「ほんの片言隻句にも」「その作家の人間全部」が現れているのであり(「文は人なり」)、それを読みとるのが読書の楽しみの源泉だと言っているのである。④が正解となる。

問四 傍線部の一文は、次の二つの文が一つになったものである。

(A)僕は理窟を述べるのではなく、経験を話す。
 (B)そうして手探りをしていううちに、作家にめぐり会うのである。

あつて、誰かの紹介などによって相手を知るのではない。そのため、②「理窟や誰かの紹介」、③「理窟ではなく、手探りして」は、(A)文と(B)文とが混合し、本文の「理窟を述べるのではなく」のかけり方が誤っている。自分の読書論は、理窟として頭で考えて述べるのではなく、自分自身の経験により体で学びとつたことを話すものである、というつながりである。そのため、④「自分の理論である」は誤り。①が正解となる。

構成

全集を読み!

読書の楽しみの源泉||「文は人なり」

文章にはその人の人柄が現れている。

↓表面に現れた文章を読むことによって、その作家の人間全部とめぐり会うのが読書の楽しみ

その人の全集を、隅から隅まで読め!

全集を読むとどうなるか

- ①その作家がいろいろなことを試み、いろいろなことを考えていたことがわかる
- ②代表作といわれるものが、たくさん思想を犠牲にした結果生まれたものであることがわかる
- ③単純に考えていたその作家の姿が、驚きでめっちゃめっちゃなる(先入観がこわれ、イメージがかわる)

その作家の性格・個性などは、奥深い小暗い処で手探りで捜さねばならぬもののように思われてくる

手探りをしていううちに、作者にめぐり会う

ほんの片言隻句(ちよつとした短い言葉)にも、その作家の人間全部が感じられるようになる

筆者・出典

小林秀雄(こばやし・ひでお)は、文芸評論家。東京都生まれ。一九〇二〜八三年。一九二九年、『様々なる意匠』で文壇に登場し、文芸批評を文芸の一ジャンルとして確立した。入試頻出作家の一人である。

問題文は、「随筆「読書について」の一部である。

手もとにこんな句がある。

菜の花のとつばづれなり富士の山

* 一茶

水澄みて四方に閑ある甲斐の国

* 飯田龍太

見渡す限りの菜の花畑の向こうにたたずむ富士の峰。一茶の句は一幅の絵を思わせる。あるいはピントの鋭いカラー写真のようだ。

龍太の句はどうであろう。水澄みて、は触ると手がしびれる、浄く冷たい水の揺らぎを想わせるが、形の輪郭はない。この水は眺める水ではない。そこに生活している者の喉をうるおす水、代々土地に住む人々の身体を養ってきた水ではないか。

四方に閑ありと唱い続けられる周囲の山々は視線の先の秀峰ではなく、ぐるりと自分を包み込んでいる山々である。山容の美を讃えるよりも、里の近くの少し鬱陶しいが人なつこい山々を伴侶とするのどかな隠逸の気分がそこに漲っている。山河の姿をあれこれ評するより、無意識のその肌ざわりを愛でる境地ではないか。国ほめの一句であろう。

菜の花の句からは、たまたまその場を通りがかった旅人のカンセイが聞こえる。床の間にふさわしい軸物一幅を拝見する心地である。ところが龍太の句は、旅行者ではなく定住する生活者がその皮膚感覚で触った山河の気配を伝えていないだろうか。暮らしの風景がそこにある。

風景には視覚の優れた風景、触覚に秀でた風景の二つの側面があるのだろう。

前者を目の捉える風景の姿、あるいはたまたまとするなら、後者は身体に触れる風景の住みこちとでも呼べばよいのだろうか。(中略)

完成 現代文

● 解答・解説→別冊2ページ (月 日)

風景を眺める私たちの視線はたしかに触覚性を帯びている。この点についてももう少し考えを進めてみよう。

人類史のきわめて新しい時期に出現した風景画が、土地を美的対象として眺めるきっかけになった、という説は広く承認されている。ところがこの風景画の構図は、現実の風景知覚に不可避なる要素を欠いていることに留意しなければならない。それは風景を採勝する人自身の身体である。

実際、私たちの視野にはいつも自分の手や足や鼻先などが必ず入っている。心理学で現象的自我と呼ばれるこんなものが画布に描かれれば絵にならないから、リアルな風景画でもこれだけは慎重にハイジヨされる。芸術としての風景画と現実の風景とはこの点で大きく違う。つまり現実の風景は常に、極近景としての自己の身体と、これに断絶的に対置される遠景との双対関係を軸として構成されている。その結果、視覚的風景のとりすました客観性は、これに対置された身体の生活感によって絶えず揺すられ受肉されるのである。

山や河を知覚するといっても、私たちは視覚だけを独立に働かせて知覚するという不自然なことはできない。知覚は生活の全体の中で行なわれるのであるから、そこに聴覚や味覚が混じり、あるいは触覚の記憶が重なるのは当然であろう。道を歩く人は、道の形だけを見ているのではない。砂利道のざらざらした感じや草いきれに包まれずに野道を歩くという行為は成立しない。

【問一】二重傍線部(ア)・(イ)の読みを書き、(ウ)・(エ)のカタカナを漢字に直せ。

【問二】傍線部(1)につき、この句は「形の輪郭」の代わりに何を伝えているか。それに当たる十三字からなる一続きの語句(句読点含む)を本文中から抜き出せ。

【問三】傍線部(2)はどのようなことを言ったものか。次の中から適切なものを一つ選べ。

実践セリ

知ってトクする

頻出作家①

□山崎正和

『劇的なる日本人』

劇的ではないとされる日本人が、西洋とは異質で、より感動的な劇性があることを指摘し注目された古典的評論。山崎の新聞に寄稿した随筆が話題されたり、小論文の課題文として使われることも多い。

□小浜逸郎

小浜は最近出題の多い批評家。著書『なぜ人を殺してはいけないのか』(洋泉社新書)、『弱者』とはだれか(PHP新書)の題名が示すように、我々の常識的な考えをくつがえすような問いを立て、論を展開していく。

1 風景学・実践篇

▼ 解答

- 問一 (ア)はんりよ (イ)いんいつ (ウ)歓声 (エ)排除
- 問二 皮膚感覚で触った山河の気配
- 問三 ③ 問四 ③ 問五 ①

解法のポイント

問一 (ア)は「はんりよ」と読み、行動を共にする連れること。人生や生活を共にする者ということで配偶者のことを言うことも多い。(イ)は「いんいつ」と読み、都会や世間での生活をわすらわしいものと思い、そこからのがれて田舎に隠れ住むこと。
補足 中国、日本には陶淵明、鴨長明といった隠者の伝統がある。飯田龍太の父、飯田蛇笏は明治時代、東京で文学活動をしていたが、家の都合により山梨県の家に帰り、家業を継ぎつつ俳人として一家を成した。息子の龍太も山梨で一流俳人として重きをなした。ここに筆者は、都会と一線を画し、甲斐(山梨県)の山河と共に生きる隠者の姿を見ているわけである。
 (ウ)は次に「聞こえる」とあるので、この「セイ」は「声」である。「喚声(叫び声)」「歓声(喜びの声)」の二つがあるが、美しい情景に感動しているので「歓声」がよい。(エ)の「排除」は不要なもの、障害となるものを取り除くことで、毎年漢字書き取りの頻出ベスト10に入る語である。

傍線部(2)で言っているのは次のようなことである。大昔から人々は山や河を見て美しいと思っていたかといえは必ずしもそうではないし、それを風景画として絵にかくようになったのは、つい最近(人類史のきわめて新しい時期に出現)のことである。そして、(風景を見て美しい、と思うからそれを絵にかく、のではなく)風景画が出現したことによって、逆に、山や河といった土地を美しいものとして感ずるようになった(美的対象として眺めるきっかけになった)ということである。よって選択肢の中で、これとあうのは③。

①は「自然の美しさ」↓「それを描く風景画」という方向だが、これは筆者の考えとは逆。「風景画の出現」↓「土地(風景を(初めて)美的対象として眺める」というのが本文。

②は傍線部(2)の「人類史の……出現した風景画」の部分のみ。
 ④は「自然の景観の美しさは古くから認められていた」が×。
 ⑤も「人類のごく初期から認められていた」が本文とは逆。

補足 西欧においては、絵というものは、古くは、神や英雄を描き、神話や伝説を題材とするものだった。つまりそれだけ神聖なものだったのだが、その後、世俗化し人間くさくなるのに二つの方向があった。一つは、神ではなく、普通の人を描く肖像画へと向かうもの。もう一つは、神話伝説のバックであり背景であった山や河、花などが独立して風景画となる方向である。だから、風景画というものは大昔からあったものではない。そして、神や神話伝説の背景であり、サシみのツマのようなものだった自然の風景が主役となることによって、逆に、はじめた自然の美しさが意識されるようになったのである。

問四 子供が「お絵かき」をするのと下のような絵をかく。山、お日さま、お花、といった「風景」とともに、自分の目では見えないはずもない自分自身の全体像がかかれる。これが「現象的

問二 本文の前半は、一茶の俳句と龍太の俳句についての鑑賞であり、一茶の句を「視感覚の優れた風景」「目の捉える風景の姿」とまとめ、龍太の句を「触覚に秀でた風景」「身体に触れる風景の住みごころ」とまとめている。「一茶の句は、「菜の花」が季語で春。菜の花畑と富士山の姿がはっきりとしており、「ピントの鋭いカラー写真のよう」である。

飯田龍太の句は「水澄む」が季語で秋。この「水」は川の水か、池の水か、あるいは生活用水か、はっきり書かれていないし、「関」についても具体的な関所のようにすを描いたわけではない。それを筆者は「形の輪郭はない」といつている。しかし、四方を山々に囲まれ、それぞれの街道に関所がある。「甲斐の国(山梨県)」のようすを実にうまくとらえている。具体的な形や物をうたったわけではないが、山間の雰囲気をよくつかんで描いている。それを筆者は「無意識のその肌ざわりを愛でる境地」(十六字)「皮膚感覚で触った山河の気配」(十三字)「身体に触れる風景の住みごころ」(十四字)といっているのだが、十三字という条件にあうのは「皮膚感覚で……」である。

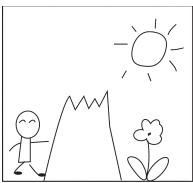
補足 一茶の作品を次の①～⑤の中から一つ選べ。

- ①奥の細道 ②おらが春 ③去来抄 ④新花摘
- ⑤松尾芭蕉 ⑥向井去来 ⑦手謝蕪村

問三 入試評論文では、この種の「逆転の発想」の論理は頻出である。

(例)ものという存在がまずあって、それに言葉がつけられるのではない。逆に、言葉がものをあらしめるのである。(鈴木孝夫「ことばと文化」)

風邪をひかないようにと服を着るようになったのではない。人間は服を着るようになってから風邪をひくようになったのだ。(丸山圭三郎「文化のフェティシズム」)



私=現象的自我

自我」だが、これでは「風景画」にならないので、風景画では排除される。こうして「客観的」風景画が成立するのである。

ところで、自分の姿全体や自分の背中を自分の目で直接見ることはできないが、「実際、私たちの視野にはいつも自分の手や足や鼻先などが必ず入っている。だが、これが入るとやはり「芸術としての風景画」として成立しないので排除される。つまり、「リアルな風景画」も、実は、客観的に視野に入ったものがあるのままで描いていけるのではない。それを「とりすました客観性」といつているのである。だから正解は③。

問五 「草いきれ」の意味は①であり、これは俳句では夏の季語でもある。

構成

視覚がとらえる風景

菜の花の
 とつばづれなり富士の山
 一茶
 =
 =
 ピントの鋭いカラー写真
 床の間にふさわしい軸物

身体感覚がとらえる風景

水澄みて
 四方に関ある甲斐の国 龍太
 形は輪郭はない
 =
 =
 無意識のその肌ざわりを愛でる
 境地
 皮膚感覚で触った山河の気配